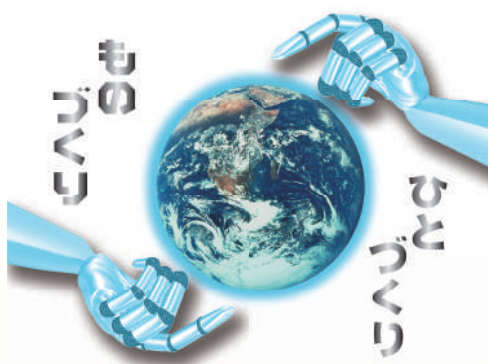


一般社団法人 実践教育訓練学会
The Society for Practical Technology Education

第4回 建築設計競技 作品集

2021年8月21日



主催 一般社団法人 実践教育訓練学会

協賛

アイディホーム株式会社(〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-46-25)
(五十音順) 株式会社 インフォマティクス(〒212-0014 神奈川県川崎市幸区大宮町1310 ミューザ川崎セントラルタワー27階)
株式会社 総合資格(〒163-0557 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル22階)
株式会社 ティーエスケー(〒261-8501 千葉県美浜区中瀬1-3 幕張テクノガーデンB棟6階)
日本住宅株式会社(〒100-6317 東京都千代田区丸の内2-4-1 丸の内ビルディング17階)
株式会社 松下産業(〒113-0033 東京都文京区本郷1-34-4)
メガソフト株式会社(〒530-0015 大阪府大阪市北区中崎西2-4-12 梅田センタービル11階)

テーマ 「リモートワーク住宅」

2020年1月、新型コロナウイルス感染症のニュースが飛び込んできた。他国のできごとだと思っていたが、2月になり日本に寄港した旅客船におけるクラスター発生のニュースで身近に感染が迫っていることを知らされた。そして4月に緊急事態宣言が発動され、日本の社会基盤や経済に大きなダメージを与え、生活スタイルが大きく揺らいだ。そしてそれは、1年が経過した今も2次感染、3次感染へとさらに拡大し続けている。

近年においても、生活スタイルが大きく変わる出来事があった。パソコンの普及により、仕事をするスタイルが大きく変化した。それまでは対面によるコミュニケーション、かつ手書きのドキュメントが主流だったものが、パソコンのモニターに向かって仕事をするようになり、さまざまなドキュメントはデジタル化された。また、コンピュータネットワークの性能が向上したことにより、人々のコミュニケーションがネットワークを介して行われるようになり、さらに国境を越えてグローバル化した。対面で行われていたショッピングもネットワーク上で買い物をすることが増え、短期間でさまざまな地域のものを家にいながら手に入れられるようになっている。

そして現在、新型コロナウイルス感染症への対応が社会全体として求められている。比較的インフラが進んでいる大学では、オンライン授業が定常化し、企業ではリモートワーク（在宅勤務）を採用するようになり、生活スタイルが大きく変化している。2000年代になりコンピュータネットワークの普及に伴いSOHO（Small Office/Home Office）も出現したが、これはごく一部の人だけが利用するに留まっていた。しかし、コロナ禍の中で、多くの人リモートワークを考え始めた結果、将来予想される社会システムが急ぎ足でやってきているともいえる。当初は、リモートワークを余儀なくされていたが、実際にそれをベースに社会活動を行うと、移動時間が削減できる、リモート会議でもコミュニケーションできる、働く人個々の生活空間にワークスペースを分散するために企業が抱えるオフィスの規模もコンパクトにできる、家族と暮らす時間も増えるなど、良い面も見えてきている。

新型コロナウイルス感染症への対応だけではなく、未来の人々の生活を創造したリモートワーク住宅を提案してもらいたい。

（審査委員長：和田 浩一）

「審査講評」

2021年、世の中は新型コロナウイルス感染拡大の収束が見られず、一進一退を繰り返している。その結果、2020東京オリンピックが1年間延長され、さらに無観客での開催を余儀なくされた。また、一部地域では緊急事態宣言が断続的に発出されている。

この新型コロナウイルス感染症により、働き方や教育など、さまざまな面で生活スタイルが大きく変化した。企業では、リモートワーク（在宅勤務）による働き方が導入され、大学の授業では、オンライン授業が定常化するようになった。コロナ禍の中で、多くの人のリモートワーク、およびオンラインでの会議や授業を実施した結果、将来の社会システムが急ぎ足でやってきた。当初は、リモートワークを余儀なくされていたが、実際にそれをベースに社会活動を行うと、さまざまな良い面も見えてきている。このような背景の下、テーマを「リモートワーク住宅」として第4回設計競技を開催した。

そのような状況にも関わらず、日本全国の一般大学・大学院学生、職業能力開発関係施設で学ぶ学生・受講生、高校生よりエントリーが80件あり、作品の応募は71件あった。2021年7月中旬に11名の審査委員によりオンラインでの作品審査を行い、1等1作品、2等7作品、特別賞（高校生の部）1作品、上位9作品を決定した。

リモートワーク住宅とは、つまり個人のプライベート住宅の中にオフィスのようなパブリック空間をつくることである。この相反する二つの空間の関係性をどのようにつくるかがポイントである。1等の作品は、地下のプライベートである住宅と上階のリモートスペースの間に、地域に開放したコミュニティスペースを挿入したことが、審査員に高く評価された。

2等の作品は、プライベート部分とリモートスペースの間に癒しの空間や子育て空間を挿入した住宅、あるいは用途に応じて空間をアレンジできる住宅、景観を生かした住宅、観光地におけるワーケーション住宅など、魅力的な提案が審査員の目に留まり、受賞となった。

（審査委員長：和田 浩一）

審査委員長	和田 浩一	職業能力開発総合大学校 能力開発院 教授
審査委員	安島 才雄	株式会社 総合資格 専務執行役員
(五十音順)	飯嶋 元広	アイディホーム株式会社 生産管理部副部長
	磯野 重浩	九州職業能力開発大学校 建築施工システム技術科 教授
	井町 良明	メガソフト株式会社 代表取締役社長
	江川 嘉幸	山形県立産業技術短期大学校 建築環境システム科 教授
	高橋 紀子	日本住宅株式会社 人事本部 執行役員 副本部長
	高橋 基史	株式会社 インフォマティクス チーフマネージャー
	竹内 一	株式会社 ティーエスケー 代表取締役社長
	星野 政博	東北職業能力開発大学校 特任教授
	松下 和正	株式会社 松下産業 代表取締役社長

1等 実践教育建築デザイン賞

にぎわいのある住宅 一家とまちの新たなかたち—

職業能力開発総合大学校 安東 尚



にぎわいのある住宅 一家とまちの新たなかたち—

リモートワークの普及により生まれる、「住宅」「街」の新たな関係性に着目し、街のにぎわいを持続的に取り入れることで、リモートワークで整えられる問題を解消し、豊かな生活を形成する。



2F 1:100
1F 1:100
B1F 1:100




【貸しスペース】
ふるさと高尾山の景観のために開放し、ふるさと自給のデザインを実現し、ふるさと高尾山の景観を鑑定する。この貸しスペースは、景観の景観に合わせた設計となる。



【生活空間と働く空間とのつながり】
住宅内の生活空間と働く空間をワークスペースとして分け、これにより、生活空間と働く空間のつながりを確保することができる。



【ワークスペース】
生活空間と働く空間の間にワークスペースを設け、生活空間と働く空間のつながりを確保することができる。



【ワークスペース】
生活空間と働く空間の間にワークスペースを設け、生活空間と働く空間のつながりを確保することができる。

背景 一高尾町—



【観光地として】
山に囲まれ、自然豊かなこの土地は、世界一の登山客数を誇る高尾山麓の街としてのにぎわいを持つ。

【観光と住宅】
観光地としての発展を遂げる一方で、観光客が減少し、住宅地としての発展が停滞したふるさとが生まれるのは、ふるさとから離れた地域の課題といえるだろう。住宅地と観光地のバランスを取ることが、街の持続性につながる。

【人々による課題】
高尾町は、これまで、「人」対「街」の関係で成長してきた。しかし、そこに人口の減少がもたらした影響は、オフィス街のような都市部にはなかった。高尾山は、「人」対「街」の関係を考えなくてはならなくなる。

住宅単体のまちづくり



行政や交通事業など大きな組織
計画
まちづくり

【住宅によるまちづくり】
従来のまちづくりは行政などの、大きな組織が主体となってきた。しかし、街路と公共スペースを持つ住宅は、その一端を担うことができる。大きな特徴となるのは、「働く人」が街のアーバンを考案する。これにより街は多様な生活、商業が育ち、街が育ちやすくなる。デザイナーが住むのはアートへと繋がりがやがて、職人が、多様な街の文化が、これまでにない街をつくることになる。

住宅内の街路空間



【自然に寄り添ったデザイン】
街路空間は、緑を植えることで自然を感じられるようにした。緑が育つという願いを込めて、自然の要素を取り入れるように、ワークスペースは緑の要素を取り入れ、緑の要素を取り入れるようにした。また、緑の要素、ワークスペースの要素などを取り入れることで、街路空間が育ち、心もよくなるようにした。

【街とのつながり】
そのつながりがだんだんと認識できるように、街路空間を育むための要素を取り入れた。

観光地の設計プロセス



屋根
柱
ワークスペース
まち的な空間
生活空間

【住宅の新しい特徴】
住宅とワークスペースの間に働く空間を挟んだ構成とした。一つの階の下敷きの設計とすることで、これまでの住宅の枠組みの中に街の概念を取り入れた。新しい特徴のある住宅であることを表現した。

【連続した空間】
各空間はスキップフロアで繋いでいくことで、連続した空間として、住宅一階一階の概念を取り入れた。新しい特徴のある住宅であることを表現した。

【観光】
リモートワークの普及により、街の賑わいを維持する。街の賑わいを維持する。街の賑わいを維持する。街の賑わいを維持する。

【講評】

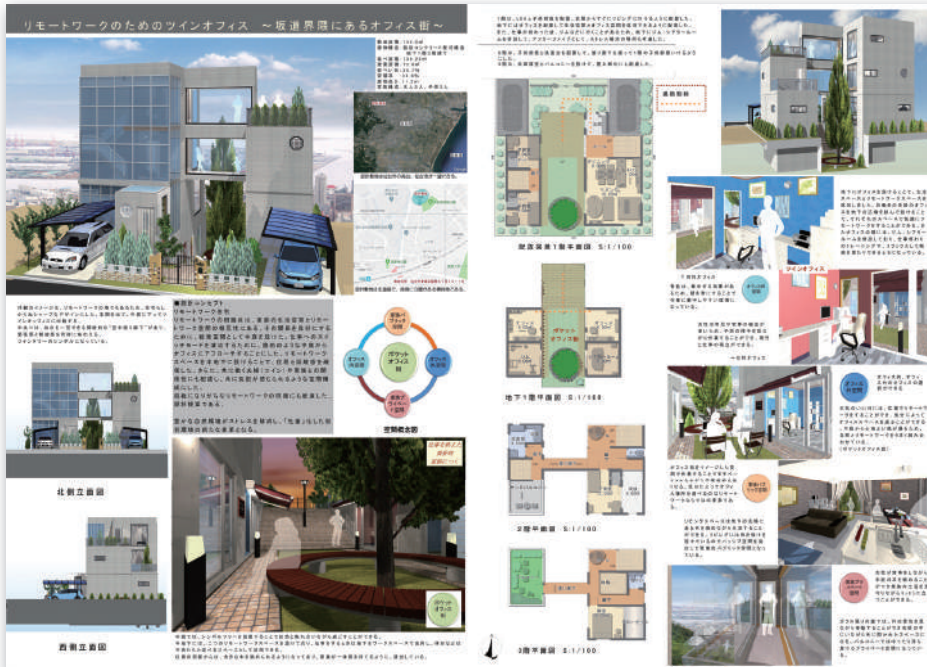
「にぎわいのある住居」では、リモートワークの普及により生まれる、「住宅」「街」の新たな関係性に着目した作品である。観光地としての発展を遂げる高尾山麓の街において、住宅地と観光地のバランスを取ることが、街の持続性につながると考え、にぎわいを住居に取り入れることで、リモートワークにより発生する問題を解消し、豊かな生活を形成しようという提案である。地下のプライベートである住宅と上階のオフィスであるリモートスペースの間に、

地域に開放したコミュニティスペースを挿入し、家族とリモートスペースの距離を取っているところが秀逸である。また、1階に貸しスペースをつくることで、高尾山の登山者、個展を開催するデザイナー、高尾町の農家の野菜販売所など、普段都市部で働く人達が地元との交流を始めることで新しいアイデアが浮かんでくる。そしてその人達で交流を図ることで更に可能性を拡張し、建築的なまとめ方も良いところが、審査員に最も高く評価された。

2等 アイディホーム賞

リモートワークのためのツインオフィス ～坂道界隈にあるオフィス街～

東北文化学園大学 菱沼 佳祐



【講評】 海を臨むことができる高台に、RC造4層構成の住宅の提案である。この最下の地下1階に「ポケットオフィス街」設けており、この空間概念がたいへん興味深い。通勤移動がなく日々の生活が単調になりがちなりモトワークの課題を、あえて一度私生活の玄関から強制的に外出させ仕事スペースに至る動線が、住人の気持ちのメリハリに寄与できる。また、孤立しやすいリモートワークに対しお互いの気配を感じさせる間取りも興味深い。

小規模ながら多様な用途が盛り込まれ、空間の使い方が工夫されており魅力と可能性を感じる。植栽を中心に配置することにより、街中にあっても自然との触れ合いを可能にする空間が住居と一体になっていることが高く評価された作品である。

2等 インフォマティクス賞

眼差しの家

沖縄職業能力開発大学校 平良 ゆう



【講評】 コロナ禍のリモートワークという課題に対し、内と外で伝わる親子の絆を意識することで「ストレスを軽減する快適な空間」を実現することを意図したプランである。海にも近く緑多いのどかな立地に、ウッドデッキ、コスモス畑、アジトスペースと工夫して、魅力的な空間を創出している。全体によく考えて設計され十分に現実的であり、「こんな家に住んでみたい」と思わせる、明るく快適そうな住宅という印象を受ける。家としての稼働のイメージを、曜日と時間軸で表現し、それらのシーンを過不足なく抽出したうえで、外観内観パースと平面図で分かりやすくまとめられていることが高く評価された作品である。

2等 総合資格学院賞

びっくり箱の家(Zauberkasten)

職業能力開発総合大学校 中田 悠介

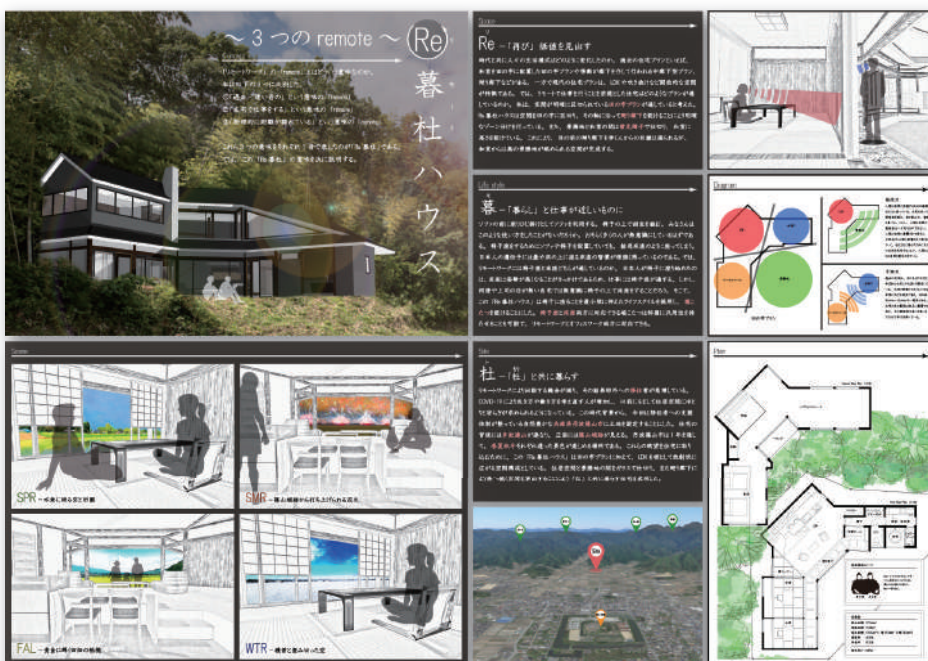


【講評】住宅のコア部を最小限の規模で作り、部屋を出し入れし動かしながら最大限の楽しみが得られるようなリモートワーク住宅の提案である。基本のコア部には玄関と水廻りのみを配置し、この四周に太陽の動きに連動するように起床、リモートワーク、趣味、就寝の空間=部屋をつくるというアイデアが盛り込まれている。蛇腹式に折り畳んだ壁を展開して部屋をつくり、そこを職場やリビングにするという、建築時に用途を固定するのではなく、気分や日によって変化が可能な建物という発想が面白い。展開イメージや家具の計画が細部まで考えられていることも高く評価された。

2等 ティーエスケー賞

Re 暮杜ハウス

滋賀職業能力開発短期大学校 菊岡 樹



【講評】「Re 暮杜ハウス」というタイトルがとてもユニークで想像力を掻き立てられる素晴らしく斬新な作品である。「3つのリモート」、再生と暮らしと杜である。田の字型・発信力・干渉力をうまく組み合わせたプランとなっている。立地、環境、ロケーションの選定がベストである。兵庫県丹波篠山市に設置されるこのリモートハウスは、春夏秋冬に異なった景観を得られる地域であり、ランドマークとして正面には篠山城址が見えるという軸線を設定している。また、ワークライフバランスの調和が現実的で見ると明らかに伝わる作品となっている。住みたくするようなプランであり終の棲(すみ)家(か)にもなるという点で、高く評価された作品である。

2等 日本住宅賞

コートを開んでリモートワーク ～独立した夫婦のオフィス～



東北文化学園大学 正木 亮

【講評】 自宅でリモートワークを行う際の悩みとして、家族の話し声や家事の生活音、同居家族のオンライン会議の声等の雑音が気になり仕事に集中できない点が上げられている。作品は、共働き夫婦が家族のつながりを保ちながらお互いに快適にリモートワークを行える住宅の提案である。1階は家庭生活の空間とリモートワークの空間を分棟して明確に分けた上に、リモートワーク室を夫婦別々に設けながら、1室につなげて使用できるように配慮されている。また、分棟としても家族がお互いに見える関係にあり、ワークスペースからも居住感をリンクさせる工夫が取られている。細かい部分まで考えられた設計が高く評価された。

2等 株式会社松下産業賞

DLIVE

職業能力開発総合大学校 前田 あやめ・馬場 倫太郎



【講評】 新型コロナウイルス感染症拡大防止を目的として俄かにリモートワークが推奨された感があるが、コロナ禍以前から、働き方改革と地方創生の新たな手段として普段の職場とは異なる場所で余暇を楽しみつつ仕事を行うワーケーションが注目されている。作品は、観光客向けにレンタサイクルや売店を営む店舗併用住宅である。居住地から出られないリモートワーカー向けに、オンラインツアーが楽しめるデータマップの発信や特産品をオンライン販売するというニューノーマル時代を見据えた具体的な事業計画が提案されている。敷地の設定と建築的なまとめ方、自然との接点、他者との接点など、プレゼンが良くできている点が高く評価された。

2等 メガソフト株式会社賞

離れのオフィスがある家 ～屋上庭園を巡ってオフィスへ～



東北文化学園大学 佐藤 駿

【講評】 仙台市内の高台に位置する「離れオフィスがある家」である。1階と3階に仕事部屋を設置して、リモートハウスとしての仕事の集中とリラックスを追究しており、「この家なら家族と住んでもいいな」と思わせる作品である。北側のカーテンウォールは、メンテや水滴問題などいろいろあるかもしれないが、インパクトがあり、雨の日も楽しく過ごせそうである。緑も多く、左下の空間には将来ホームエレベーターの設置ができそうなので、永く暮らせそうである。居住空間からちょっと離れた仕事部屋は、会話なども聞かれない遮蔽性が高い。図面表現にも独自性と工夫が見られ、室内のレイアウトも良い。マイホームデザイナーを活用した表現力が高く評価された作品である。

特別賞 高校生部門

HOUSE IN THE FOREST

兵庫県立東播工業高等学校 田畑 陽菜



【講評】 リモートワークが落ち着いてできるように緑豊かな森の中につくられた住宅である。1階に大きめのWIC(家事室)を配置することで、脱衣所で服を脱ぎ、そのまま洗濯機に入れた後、隣のWICの乾燥機へスライドし、そのまま収納できるように提案している。そうすることで、水で濡れた重い服を外まで持っていかなくてもよく、花粉や黄砂などに悩まされる人へも配慮している。また、2階のリモートワークをする部屋に隣接して休憩スペース、バルコニーを連続させることにより、仕事で疲れた心身をその状況に応じて癒すことができるように工夫されている。随所に機能的な仕組みをつくっているところが高校生として高く評価された作品である。

上位作品

空間と生活を守る家

東北職業能力開発大学校 相田 大輝



Work from life

沖縄職業能力開発大学校 金城 実佑



土間でつながる 土間から広げる

東北職業能力開発大学校 佐藤 優太



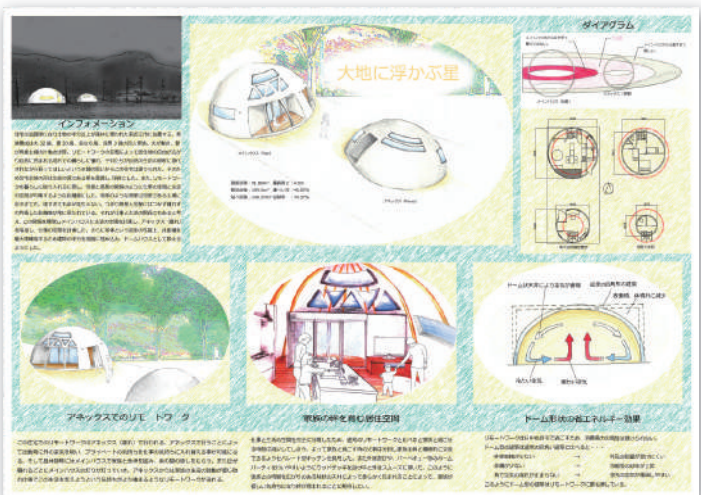
参みなじむ

～ソトがウラヘウラがウチへ 亀崎リモートワークスタイルハウス～
日本福祉大学 鈴木 晴也



大地に浮かぶ星

滋賀職業能力開発短期大学校 田中 揚



共に生きる

九州職業能力開発大学校 南里 志門・上川畑 晴登



上位作品

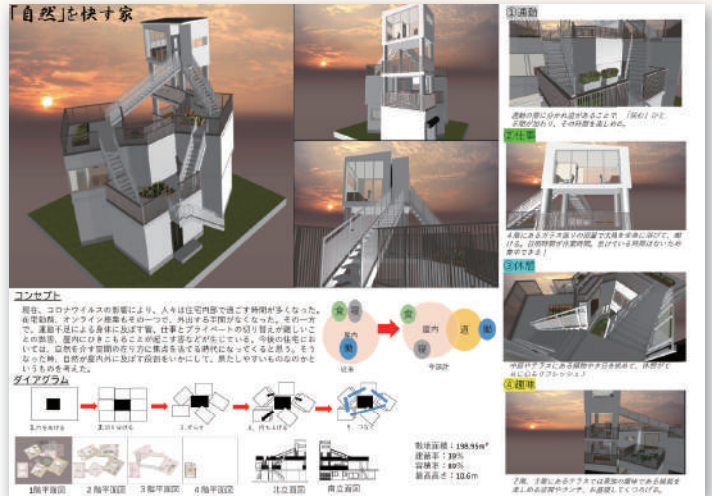
静と動

九州職業能力開発大学校 福富 岬・伊藤 ゆかり・木田 ゆみ



「自然」を快す家

職業能力開発総合大学校 増田 匠吾



2×2×2×2×2×2×2×2 一生活にもっと変化を一
職業能力開発総合大学校 渡森 史郎

